

宇都宮氏の危機・宝治合戦

(1247〈宝治元年〉年6月5日)

今からさかのぼること750年前の鎌倉時代に、上三川を支配していた宇都宮氏の存亡の危機となる、大きな事件が起きました。

鎌倉幕府は、源頼朝を支えた有力な東国武士たちの協力によって、政治が運営されました。しかし、頼朝が亡くなると、妻政子の実家である北条氏が権力を握るようになり、比企氏・畠山氏・和田氏・梶原氏といった有力御家人が次々に北条氏によって滅ぼされ、北条氏の力は次第に強まってきました。

このような中で、北条氏に次ぐ重鎮であった三浦氏にも、北条氏の策略

の手が伸びます。三浦氏は北条氏に協力的で、親戚関係でもありましたが、独裁を指す執権北条時頼にとつては、邪魔な存在でした。そこで、時頼は三浦泰村を挑発し挙兵させると、これに乗じて、1247年



宝治合戦がきっかけで上三川城が築城されました

6月5日に三浦氏の一族を滅ぼすとともに、同じく有力御家人であった千葉氏や反北条氏の勢力をも滅ぼし、北条氏の独裁政治の基礎が形作られたのです。これが宝治合戦という事件です。

さて、この事件は上三川とは関係がないように思いかもしれませんが、この事件が契機となつて、上三川城と多功城が築かれました。宝治合戦の際には、反北条氏の武士も多く自害していますが、その中には、

宇都宮氏一族の宇都宮時綱(初代上三川城主横田頼業と初代多功城主多功宗朝の兄)、その子時村と五郎もいました。このことは、宇都宮氏が、幕府の実権を握った北条氏に滅ぼされる可能性があることを意味しており、危機感をもった宇都宮氏は、鎌倉からの攻撃、つまり領土の南の守りを固めるため、上三川城と多功城を築いたのです。

上三川城と多功城は350年にわたり、地域を守るとともに、象徴としても存在しました。特に上三川城は、城址公園として現在も憩いの場となり親しまれています。

上三川の歴史を語る上で重要な二つの城が造られた背景には、日本史上に残る事件があったことを忘れてはなりません。

無意識に心の揺れが声に出る

大町 大八木トク

おばあちゃんすぐに財布を開けたがる

石田 稲葉 チイ

待ち合い所診察券も元気です

上町 上野 広江

生きるため善人だけでいられない

上蒲生 渡辺 文子

あり余る刻へふたりのにらめっこ

三村 上野久美子

渡り終えても吊り橋の目まわす

石田 大塚 ナカ

若き芽に花に一日癒される

上蒲生 鶴見 敏子

嗜好き煙りを探す耳と口

上蒲生 鶴見 敏子

胃袋も休みが欲しい食べ盛り

石田 前原 秀雄

草原の風を駆けたい犬の夢

上蒲生 菅原 妙子

堀越しにお皿行ったり来たりする

大町 小口 達子

タンポポの綿毛の風とたわむれる

石田 森山 アイ

